

『政界往来』一九五八年九月（政界往来社）

文教政策を如何に期待すべきか

反動的と呼ばれる根底を衝く

矢口 新

文教政策に関心を持つ人々

文教政策は反動するかという題を与えられた。私は実を言うと反動化というような言葉で、相手をきめつけることはきらいである。終戦後しばらくの間、そういう物の言い方はやった。気にいらぬ奴をなんでも反動ときめつけた。現在はその反動で、曾って反動とかたづけられた人々の勢が強くなった。従っていわゆる進歩主義者に言わせれば反動的勢力が強くなったということで、益々反動化の方向に歩いているという観測になる。しかし反動的といわれる側に言わせれば、行きすぎの是正をしているのだということになる。そういう様子をみていると何を以て反動とするかということはおもしろいことがわかる。

さて文教政策が反動化しているかどうかということ、実を言うとなかなか判定はむづかしいことである。いわゆる進歩主義者の如くに政府のやることはなんでもかんでも反動ときめてかかるならいと易いことであるが、私はそういう態度はとりたくない。けれどもまず出発点として、最近の文教行政のあり方を心ある人が心配しているという点、どうも行き過ぎではないかということをおもっている人が多いようである、ということをおもって置かなくてはならぬ。もちろん世論

調査をしたわけではないから、それが私の主観だといわれればそれ迄であるが。

ところで何がそういう印象を与えているかというと、何といつても松永文相時代に行われた道徳教育の時間特設と、勤評実施の二つの政策である。この二つの政策に対しては、日教組を中心とする勢力が相当な反対をして、もはや教育問題の域を通り越して、政治問題化している。そこを政府が強引に押し切ろうとしているので、益々反動化の印象を強くしていることは争えない事実であろう。もちろんそれに拍手を送っている人も多いが、そういう人々は、日頃文教行政に関心をもっている人々でなく、むしろ一般大衆と素人が多いようだ。いわゆる市町村のボスといわれる人々は、どちらかというと反動化とは見ていない。PTAなどでも役員層は与党的であるが、一般の父兄で教育に熱心な人たちは、余り表面へ出て来ない人達は最近の文教行政のあり方には批判的のようである。もう一つPTAにはそういうことに全然無関心の層がある。この人達は文教行政についての意見をもつより、ボスの意見に従うという人々であろう。

文教政策に批判的な人々の意見は、必ずしも日教組などと同様でないこともまた注目すべきである。教組の動きに対してはにがにがしさを感じつつも、また一方では政府が教組あたりをそうさせているのではないかと、納得しないものをもっている。この辺の微妙な雰囲気は、言葉で表すのはむづかしいことだが、政府の文教政策が反動化しないことを願っている気持ちだと言ってもよいかも知れない。そして必ずしもその恐れなしとしないのだという気持ちが動いているのであろう。この辺の事情を明らかにすることが私の役目であろう。

道徳教育特設の考え方

政府の文教政策がここしばらく道徳教育と勤務評定の二つに焦点

があわされているのは、新聞も伝える如く、日教組との対決ということに政府の方針があるのである。日教組との対決ということが本気で考えられているとしたら、これはおかしなことであると思われる。それは日本の政府が自らを教組などと同列において倭小化することになりはしないか。しかしそういう論議に入る前に具体的にその政策自体を検討してみよう。

道徳教育の進め方には、最近において大きな路線の変更が見られる。この問題はここ数年の問題であったが、これ迄はこれを学校教育の全面において行うという方針であった。ところが今回はそれを時間特設という形で大きく変更したのである。時間特設というのは教科への一段階であり、それは修身の復活だ、それは反動だというのがこれに反対する人たちの意見である。しかしこの反対には論理上いくつかの飛躍がある。時間特設は教科への一段階だというのは、これは新聞などによれば文部省の担当局長が発表したというのだから本当であるが、それが修身の復活だ、そしてそれは反動だというように単純には考えられないのではないか。もちろん反動でないとも言えない。それは内容によってきまって来ることであろう。特設時間が教科になれば形は修身に似て来る。だからといって、その内容が軍国主義の内容になるとは言えない。それは別個な問題であろう。今迄の所、特設時間に扱うべき内容として出されている指導要綱をみると、それが軍国主義であったり、超国家主義であったりしているとは誰にも考えられないであろう。こうみた限りではこの点については反動的だということとは言えそうにない。

しかし特設すること自体が反動だというようにみる考え方もあるかも知れない。しかしそれは反動という言葉の濫用である。凡そ道徳教育ということを考えるのは反動だというのなら、そういう論も成り立つが、教育とは道徳教育でないものはないのである。しかしその

方法上の問題には、種々論議がわかれる所がある。時間を特設するというのは方法論上の問題であって、そういう方法には反対する人は多い。各学年三五時間を設けて、道徳教育を行うということであるが、若しそれだけで道徳性を育てることが出来ると考えたならそれは奇妙な考え方というべきだろう。文部省といえどもそういう考え方をとっているわけではないのであって、特設時間も設けるが、その他学校教育の全面において道徳性を育てる方針をとるといふ考え方だと言っている。しかしそれにしても、時間の特設についてはまだ問題がある。それ以前にもっと努力すべき点があるのではないか。学校生活の全面において如何に道徳性を育てるかを具体的に考えるべきだという意見があるのである。それをしないでいきなり時間特設を打ち出したのは多分に素人的な考え方であるというのである。この意見は正しい意見といつてよからう。生活は陶冶するということを具体化しようという考え方である。こういう立場の人々は、やはり文部省の時間の特設という方針に疑問を持っているが、しかしこの限りでは、この人々は文部省の政策を反動的だとは言わない。

不審を与えた文部省のやり方

しかしこの人達は、文部省のやり方に対してもっと別な疑問を持っている。何故文部省はもっと様々な意見を入れて、ガラス張りの中で意見をたたかわして、その結果として一つの方策を打ち出さないのであるのかということである。成る程この政策の決定と実施には、型通り教育課程審議会が開かれて、その答申によったことになっているが、一般に与える印象ははじめから一定の路線があつて、審議会はその上を走つただけのように思われる。事実政府や文部省が既定の方針をもつてそのように政策を実施しようとするれば、審議会のメンバーなどは自由にきめられるのであるから、反対する人は委員にしなければよい

のである。教育課程審議会などは一片の形式にすることも出来るのである。誠に奇妙なことだが、都合のよい人だけを集めて審議会をつくることは、一向差し支えないように出来ている。今度の時間特設問題では、実際にどうだったかはともかく、その審議で時間特設についての問題の基本的な点が十分に論議され合理的な考え方が打ち出されたとは見えないのである。特に反対意見が出た形跡がなく、予定のコースをすらすらと走ってしまったように見える。

様々な意見がある所に、よりよい政策の打ち出される地盤もあるのであるが、それを避けようとしているのは、どういふことだろうか。文部省が一定の結論をもっていて、それに賛成する人だけを集めて、お手盛りをやったのだからとかんぐる人も出て来る。尤も一定の結論があつても、それに自信があれば様々な意見を聞く態度も出て来るかも知れないが、自信がないから、一味徒党だけでやることになるのかも知れない。その結果が素人には歓迎されても、多くの専門家に納得の行かない政策が打ち出されるということになつてゐるのではないか。真面目に教育問題ととりくむ人はそういう心配をしてゐる。

なるほど特設時間というのは、生活の中の陶冶といふことを一年三五時間の枠の中へ切りかえて、素人向きにはいかにも充実したように思わせ、実は基本的な道徳陶冶を忘れさせる結果になる恐れを多分にもつてゐる。日本人の道徳性の陶冶の問題は、極めてじみ努力を必要とするむづかしい問題で、学校生活ばかりでなく、家庭生活においても或は社会生活においても、凡そ生活の全面において、これと本格的な取り組み方をしなければよい結果はみられないような問題である。一般の素人が考へてゐるような、修身の時間を設ける位では解決しないのである。

このような重要な問題が軽々に取扱われているような印象を与えるのは好ましくないことである。事実そうだとしたら、大事な問題が

民主的ならざる方法を以て軽々に取扱われ、権謀と術数とによつて押し切られることになり、それは民主的な方法によつて真理と、正義を実現しようといふわれわれの理想に反する。事が教育問題に関するだけにこれは最も危険な反動的傾向とも言えるのである。打ち出された政策自体よりも、もっと根深い所にある、最も陰險な反動性である。多くの人々は、そういう印象を政府が与えないように願つてゐるのではないか

勤務評定以外にも重要問題がある

ここ一、二年の間、文教政策が日教組政策になつてしまつてゐるといふ感を抱くのは筆者のみであらうか。勤務評定はその最たるものであるが、これも徒らに強引さのみが目についてゐる。日教組のヒステリックな反対もまたにがにがしい限りであるが、こういうことによつて教育問題の本道が忘れ去られてゐる結果になつてゐることは、心ある人々を歎かしめるのである。

現在教育問題は山積してゐる。一寸考へても、すしづめ教室の解消の問題、科学技術教育の振興の問題、教師の待遇改善、教員養成制度の問題、勤労青少年教育の制度確立の問題等々である。これらは選挙の時だけは公約として叫ばれるが、正直の所、それをどうして解決するかという具体的政策は、何等うち出されたことがないのである。もちろんこれらは非常に困難な問題であり、並大抵の努力では解決し得ないものばかりである。しかし政府や文教当事者の考へる如く単に経済的裏づけばかりが問題なのではない。これらの問題は何れも十年計画的な方法によつて解決をはかる問題であつて、長期に亘る科学的な計画を必要とするものばかりである。しかもそれらはどれ一つをとつても日本の伝統的な教育観を打破して、最も近代的教育観の基礎の上に打ち立てられるものである。

実際の所、一般大衆の常識では、すしづめ教室をそれ程おかしいと思わず、現在の如き程度で科学技術教育を充分と考えており、教師の待遇も現在が当たり前だと思っており、勤労青少年教育といえ、進学しないものへの慈善的教育で、いわば理想主義だと考えているのである。そういう段階では、経済的裏づけの見通しがつかないというこゝとで見送つて平然としていられるのである。理想はそうだが、貧乏な日本ではまあしばらく待つてもらおうということ、で惰性に従つて日を送つていられるのである。

しかし実はそんな問題ではなく、ここ十年の間には、少くともこれらの問題を解決して、世界の文明的国家の水準に達しないでは、将来の国運を慮らねばならぬ問題なのである。政府、与党、文教の府がそういう認識をもたないとは言わないが、それにしては、その政策がどうして現在のように貧困なのであろうか。

文教政策は選挙の前の思いつきや、日教組の対策というような所からは出て来ないのであつて、そこには科学的な研究や専門家の組織的な調査が必要である。長年問題として認識されていながら、掛け声ばかりで、いよいよになると泥縄式の政策を実施するのは、日本人の悪癖であるが、そういうえば勤務評定もその感なきにしもあらずである。何故法律にあるものを今迄ほおつておいたのか。日教組対策に使おうと思ひ立つたら、今度は命がけで何がなんでも押し切ろうとして、中味の未熟さなどは問題にしないというのであろうか。

問題は反動より根深いところ

若し政府が確たる文教政策を打ち出そうとしたら余程根本から考え直さなければならぬのではないか。思いつきや選挙対策などというこゝとで文教がうまく行くと考えている所に問題がある。

最近行政官が専門家を批判し、その意見を尊重しなくなったとい

う噂も聞く。ある学者の意見は自民党的か社会党的かという基準で各種の委員を詮衡するというのである。学者の中にも一部そういうイデオロギー的言動を弄するものがあることを認めるが、それも実は文教政策の貧困の故であるとも言えるのである。自信を持った文教政策が押し出せるような科学的研究と調査があれば、そういうものを粉砕することは何でもないのである。

さてこのように考えると、文教政策が現に反動しているかどうかよりも、問題はもつと根深いところにあるのではないか。雄大な結論としての政策がないこと、そこに素人的政党人と官僚の思いつきが横行するものがあること、それが本来中立たるべき教育の問題を政治化して、著しく事態を混乱せしめていること、こういうことが根本問題である。

そしてそれは結局反動化につながるものである。こういう事態が長くつづけば、そこに生れるものはやはりアクションとリアクションの関係で、次第に泥沼に陥ることは目に見えている。つまり文教政策というものが確立しないこと、科学的、計画的な結論をもたないこと、そのことが反動化につながるものであることを深く恐れなくてはならないであろう。政府が日教組対策などを文教の中へ持ちこんで来ること自体がおかしいのであつて、正々堂々の文教政策を計画実施することを通じて、教育が真にその中立性を維持し得るようにすることが政府のつとめであろう。それを忘れて教育を政治問題化することは、やはり反動的傾向といわれてもやむを得ないのではないか。

(国立教育研究所・教育内容研究室長)